

随筆

## マレーシア駐在記

小泉達也

## 1. はじめに

私は2020年～2023年にかけての3年間、KYB-UMW MALAYSIA Sdn. Bhd. (以下KMSB) に赴任し、生産技術部門およびメンテナンス部門、安全部門などに関する業務を行ってきた。また、駐在員としてマレーシアという国に住み、多くの経験を積むことができた。

今回のマレーシア駐在記では、コロナ禍の状況、私が感じたマレーシアという国の文化、日本との相違点、得られた経験を一部紹介する。



写真1 コロナ禍のマレーシア中心部の状態

## 2. コロナ禍により隔離生活

私の駐在員生活は隔離生活から始まった。2020年世界的に蔓延したコロナウイルスは多くの方々への生活へ影響を及ぼし、2020年初旬に渡航が決まっていた私の駐在員生活にも当然影響した。難航した査証（ビザ）の取得も、渡航許可が下りると直ぐにマレーシアへの飛行機へ乗り、クアラルンプール国際空港へと向かった。クアラルンプール国際空港も世界的なハブ空港で、出入国審査から荷物を受け取るまでに通常1時間程度かかるが、入国した当日は、

出国審査に約5時間程度とかかったと記憶している。基本的に世界的な混乱が始まった直後でルールやどうすれば正しいのかは誰一人としてわからず、手探り状態だったため、全てが混乱状態であった。当時入国した数便の全ての乗客者は、通常の出入国レーンではなく、その脇にある特別室のような場所で一人一人の名前を呼ばれるのを待ち、簡単な質疑により入国審査が完了となる手順であったため、かなりの時間を費やした。その場にいた全ての人は、不安な状態で待ち続けた。結果的に、その日の内に空港から出られたが、即隔離生活はそこから始まった。

2020年当時のマレーシア国内のルールは、全ての入国者に対して一律2週間の隔離を課し、2週間が終了した時点でコロナ検査を実施し、陰性の人のみ解放され、私もそれに従い隔離生活後近くの国立病院にて検査を受け、隔離生活から解放された。

後に、2020年のほぼ同日、同週に入国した商社の方や営業の方などと話をすると、お互い大変な時期にマレーシアへ入国し、海外生活を始めた同じ境遇の仲間としての連帯感が沸き、他の会社の方々ではあったが、「あの時は大変でしたねぇ」と笑い話のように振り返られる人達と出会うことが多かった。

## 3. 業務開始は在宅勤務

隔離生活から解放され、KMSBでの業務をスタートしたが、コロナウイルスは収束せず、2021年の初旬にはマレーシア全土でロックダウン（都市封鎖）がマレーシア政府から発せられ、官公庁や病院といったライフラインを除いた全ての業態（サービス業、製造業、飲食業など）が操業停止となり、多くの方が強制的に自宅待機あるいは在宅勤務となった。

ロックダウン時は、基本的に外出禁止で、食料品を買うためなら数キロ圏内で1人のみで行動可などの厳しいルールが発表され、違反をすれば罰金あるいは禁固刑と処されることから、守らざるを得ない状況であった。



写真2 工場内のコロナ対策に関する掲示

コロナ対策に関するマレーシア政府の発表は、SNSやマレーシア独自のスマホアプリから情報が入り、マレーシア国民全員へ発信され、それに従う形であった。異国に住んでいる我々にとっては、マレー語による発信を英語や日本語へ変換する事で理解する必要があった。マレーシア政府が発表する対策スケジュールは、工場に出勤できる人数や時間が決められ、だれをいつどの場所、工程へ配置あるいは出勤させるのか、また、生産技術部門としては、生産準備は部品がある限り溶接工程を行い、仕上がれば組立工程に回すなど、可能な限り出来る事を実施していくという状態であった。しかしながら、政府から発表されるルールも1, 2週間で操業可、操業不可が変更となった事もあり、物を作るだけでなく、出荷する事や部品の受け入れ、発注するといったロジスティクス関係が特に大混乱で、毎日のように調整、連絡とかなり大変であった。



写真3 オフィスの消毒の様子

在宅勤務中は、投資案件の会議や資料作成、工場内物流改善など限られてはいたが、Teamsミーティングを利用し上職と会議、部内での会議実施と、かなり忙しい在宅勤務であったと思うと同時に、マレーシアスタッフとの共通言語はやはり英語で、2016年のACTIVE研修で英語を身に着けておいて良かったなと痛感した。また、マレーシアという国は、英語のレベルが高く（英語が通じる機会が多く）、工場内や普段の生活でも80%近く英語で完結できたため、3年間マレーシアに住んでいたが、マレー語を頻繁に使用しなければならない状況は少なかった。

むしろ、仕事の上では「中国語もできたらなあ」と考えさせられる機会が多かった印象を受けた。

## 4. マレーシアの文化

### 4.1 各国の文化

マレーシアという国は、一般的にイスラム教の国であるが、約7割がマレー系マレーシア人、約2割が中華系マレーシア人、約1割がインド系マレーシア人と主に3つの文化また、その他の文化が交じり合った国である。そのため、駐在した3年間で3つの国に住んでいたような感覚であった。2022年の暦の流れでは、日本人にとって1月1日「元旦」は、正月に該当し1年の始まりや休暇に相当する日だが、中華系の人達は、2月が旧正月で「新年開来」と祝い、街もCHINESE NEW YEAR一色となる。



写真4 中国文化の旧正月

4月になると、イスラム教徒の方々にとって大きなイベントである「断食」や「ハリラヤ (Hari Raya Puasa)」といった祝日があり、多くの人達が田舎 (Kampung) への帰省や家族での集まりを行う機会が、加えて8月31日マレーシアの独立記念日 (Hari Merdeka) にも国を挙げて盛大なパレードが実施されるなど国内は祝賀ムードが続く。



写真5 マレーシア独立記念碑

月日は流れ年末近くになると、11月にはインドの祭り「ディパバリ (Deepavali)」があり、個人的に私が住まいとしていたクアラルンプールのバンサー (Bangsar) エリアは、インド系の方々が多かっ

た。住んでいたコンドミニアムの近くにあった由緒あるインド寺院には、多くの正装された男性やサリーを来た女性がお祈りのために集まる姿が目に入った。



写真6 デイパバリのコラム (Kolam)

補足するが、マレーシアの人口の比率はあくまで凡そであり、その他アジアや欧米の人々も住み、文化も根付いている。また、暦の流れも、新暦、旧暦、イスラム歴では1年の長さが異なり、毎年、旧正月、ハリラヤやデイパバリは同じ月では無い。

#### 4.2 各国の言葉

当然住んでいる国がマレーシアであるため、街の看板や標記、朝の部署内の朝礼がマレー語で、仕事上も中華系、インド系に関係無くマレーシア語での会話が主である。毎日のようにマレー語に触れる機会は多いため、否応なしにマレー語が少し聞き取れるようになったが、普段マレー語を話す必要性が少ないため、マレー語を話す事がほぼ出来ない状態で帰任した。そのような語学力のため、KMSBスタッフからマレー語で話しかけられ、英語で言い返すといった不思議な状況で仕事をしていた時があった。

マレーシア国内の設備関係の取引先に関しては、特に中華系の方々が多く、前述したように、マレーシアには中国文化も根付いており、中国語も多く見聞きする。今から書くエピソードは、中華系マレーシア人の話ではないが、設備の不具合対応時、台湾メーカーとTeamsミーティングを行った時の事。台湾メーカーの技術者は台湾語のみで、画面越しの営業の方が英語へ通訳し、会議を進める状況であった。ただ、通訳の方は、技術系の方では無いので、詳細な不具合箇所が我々KMSBメンバーへはうまく伝わらないことが多かった。そのため、KMSB側もKMSBスタッフの中華系の方に来てもらい、何とか台湾語→中国語→マレー語or英語への翻訳をお願いし、会議を進めていった。しかしながら、その

中華系のKMSBスタッフも技術系ではないので、台湾メーカー側の技術者の詳細な意図が、私を含めたKMSBメンバーへ伝わらず、混乱する時間が過ぎていった。会議も最終局面で、台湾メーカーからTeamsで共有頂いた報告資料が台湾語(漢字)で書かれており、その際、多少の漢字と技術的な事が理解出来る私が最初に正解へ辿り着いた。そこからKMSBスタッフへ英語で説明し、情報を共有する事ができ、その会議は事なきを得た。

普段、通訳を介して業務を行っておらず、その台湾メーカーとのTeamsミーティングの主言語は台湾語or中国語で、通訳を介して仕事することがこんなにも大変な事なのかという事と、やはり世界人口的には、「中国語もできたらなあ」と考えさせられる会議であった。

また、マレーシアには、インド文化も根付いており、インド系レストラン、インド系スーパー、インド寺院などが街に溢れており、視覚的な情報=伝統的な色や光、聴覚的な情報=街で聞く音や人々の会話、味覚・嗅覚的な情報=お香の匂いやスパイス、全ての入ってくる情報が日本とは異なり、日本人の私にとって衝撃的な事柄ばかりで、「インドへ行けば人生観が変わる」と言われているが、このマレーシア国内のインド文化に触れて、その言葉の意味に納得ができた。

#### 5. マレーシアでの経験談

コロナによる規制は、2021年月中旬から徐々に緩和され、国内外での移動あるいは旅行が制限の下、許されるようになった。私は、赴任や仕事以外で8か国他の国へ訪れた事があるが、マレーシアを旅するのは初めてで、規制が緩和され、行動が許可されたタイミングでマレーシア国内の各地へ行くことができた。仕事以外でもマレーシアという国、文化から多くの経験が得られた。

マレーシア北西部の島のペナン (Penang) へ旅行した話。その日は、ヒンズー教の祭りタイプーサム (Thaipusam) が行われていた。タイプーサムとは、マレーシアとシンガポールの2か国のみで行われている「奇祭」と言われており、偶然そのような行事に出くわせたのは幸運であった。街の中を山車が練り歩き、その道を清めるためにココナッツを地面に叩きつけるなど、見たことが無い祭事が行われ、多くの人々が集まり、その人達の活気と強烈な祭事に圧倒されながらも、私のような外国人に「一緒に祝おう、一緒に踊ろう」と参加を促すような声をかけてくれる方々に影響され、積極的に祭りに参加する事にした。

メインイベントも終わり、ペナンの街を歩いていると「君らもこっちに来い」というようなジェスチャーをされ、恐る恐る誘われるがままその人の方へ向かうと、マレーシア以外でもあるかもしれないが、祭り事になると食事を振る舞う風習があり、私はその場に誘って頂いた事がその時わかった。最初は、申し訳ない気持ちが先行し、断る行動をとっていたが、誘って頂いた方の優しさで外国人の我々にもカレーを振る舞って頂いた。米、具材、カレーと食堂のようにプレートに載せて頂き、いざ食べるとなると、フォークやスプーンは、当然無し。私は、人生で初めてに近い形で、カレーを手で食べた。その時ばかりは、隣にいたインド系のご家族からGoodと褒められた。その後も、KMSBスタッフとの出張時、マレー料理のお店へ入った際に、皆で料理を手で食べた事を思い出したが、既に数回経験している私は何の違和感も無く手で食事を行った。手で食事を行う事が正式な文化を持つ人達と共にする＝郷に入れば郷に従えであり、私にとって貴重な経験をしたと思う。



写真7 祭りの山車



写真8 ココナッツとカレー

マレーシアには、多くの観光地があり、ニョニヤ料理 (Nyonya) で有名なマラッカ (Melaka) や中華系文化が残るイポー (Ipoh)、ランカウイ島 (Langkawi) などへ仕事の合間を縫いながら行くことができた。その中でも私は、マレーシアの南東部に位置するレダン島 (Redang) が一番良かった。

レダン島はマレーシアで、一番美しい島と称される程、海や砂浜が綺麗で、「南国に来た」と思える場所であり、コロナ明けの短い期間で、2回レダン島へ行くほど行きたい場所であった。また、マレーシアで印象的だった物は、普通の街中に生えている動物や植物。日本と東南アジアでは気候が異なり、生えている植物も生息している動物も初見の者が多かった。また、イスラム教のモスクは、見る形、大きさ、デザインが日本のお寺や神社とは異なり、世界の広さを感じた。



写真9 マラッカとイポー



写真10 レダン島



写真11 動物と植物



写真12 モスク

一方で、私が住んでいたクアラルンプールは、マレーシア最大の都市かつ首都であるため、有名なペトロナスツインタワーやKLタワー、独立記念広場といった有名な建物が立ち並ぶ大都会である。マレーシアにも国産自動車メーカーや日本の自動車メーカー工場が昔から存在する事もあり、レース文化が根付いており、セパンサーキット場ではMotoGPが現在も行われ、MotoGPが行われる週は、クアラルンプールの中心地で特別なイベントが開催されていた。シンガポールへ旅行した時も、コロナによる行動規制が世界中で緩和され、3年ぶりのF1グランプリが開催されるタイミングで、街中がF1一色となり、一時中断されていたイベントも、2023年には、数年ぶりに復活しつつあった。

マレーシアに入学した2020年は、全てのイベントが中止あるいは禁止で、行動規制や多くの制限下で暮らしていたが、当時と比べると、元の世界に戻りつつある瞬間でもあった。



写真13 モトGP色ペトロナスツインタワー



写真14 シンガポールF1グランプリ

## 6. マレーシアでの業務

マレーシアでの業務担当は、主として生産技術部門であったが、メンテナンス、安全、工場施設管理など多岐にわたった。普段日本で実施する事は無い、部品の発注後の経理部門への相談や納税、設備輸入への対応、物流やトラックスケジュールの確認調整といった、北工場では他部門の仕事に当たる案件を経験した。

マレーシア工場は、4輪のショックアブソーバと2輪のフロントフォーク、オイルクッションユニットを製造している。北工場で4輪部門に所属している私は、2輪の製品を当然扱った事が無かったが、4輪同等2輪も担当した。

赴任当時のマレーシア工場の状況は、コロナ禍ではあったが、マレーシアの経済は成長をし続けて、自動車やバイクの需要が増加傾向で、生産能力が追い付いていない状況であった。製品群も多いため、機種移管やレイアウト変更のみで対応できることは不可であった事から、設備の大型投資を実施していく方針であった。

4輪の場合、めっき装置、溶接工程、組立工程、センタレス工程など多くの設備投資と条件設定～試運転、安全宣言を実施していった。仕事は一人で完結する事が絶対に来ないため、KMSBメンバーと密にコミュニケーションを取りながら、推進していった。また、専門的な事項は北工場からアドバイスを頂きながら、問題を解決することができた。KMSBスタッフと共に仕事を進めていく事で、多くの仕事を成し遂げることができ、この場を借りて、改めて感謝を申し上げます。

Terima kasih banyak

2輪の場合もまた、ニッケルクロムめっき設備、OCU組立工程改善の立案など大型投資案件が続いた。4輪と2輪は似て非なるもので、設計思想や図面が異なるため、作り方も異なる。特に、鑄造、コンデンサ溶接、スナップリング挿入など、全く経験が無かった工程を目の当たりにした。経験上解決できる問題もあったが、多くの案件は自ら解決する方向へ導けなかったため、KMSの方々から多大なサポートを頂いた。何度も電話にて相談して頂き、かつマレーシアへ何度も直接技術支援を頂き、本当にありがとうございました。この場を借りて、御礼申し上げます。

多くの案件を処理する必要がある、目まぐるしく過ぎていく日々であったが、仕事の成果の一部として親会社のUMWグループからKMSBの生産技術部門に対して、ベスト革新賞（グループ賞）：BEST INNOVATOR (Group) を受賞する事ができ、皆の頑張りが報われた瞬間であった。

なお、この授賞式にはドレスコードがあり、マレー系の正装を1枚も保持していなかったため、服を調達する事がかなり大変で、ローカルスタッフから何処で購入できるのかなど色々教えて頂き、助けてもらった。



写真15 受賞時KMSB生技メンバーとの写真

## 7. おわりに

約3年間のマレーシア駐在の間に携わった全ての方々に御礼申し上げます。コロナ禍の閉塞的な状況から徐々に世界が開いていく時代にマレーシアに駐在できたことを幸運に思います。また、KMSBは2023年で創立40周年を迎えられました。今後の更なる発展と飛躍をお祈り申し上げます。

---

## 著者

---



### 小泉 達也

2010年入社，オートモーティブコンポーネンツ事業本部サスペンション事業部生産技術部第一生産技術課。KMSB駐在を経て現職。自動車用ショックアブソーバの工程設計に従事。